



# 国際化の最前線から



## 自分の得意を活かして地域に貢献しよう ～生き甲斐につなげるための日本語教育の展開～

群馬大学 教授  
結城 恵

### ハタラクラスぐんま地域日本語教室

群馬大学では、2013年度より、外国人集住地域である太田市内にある本学キャンパスを活用して、外国人住民を対象とする日本語教育に取り組んできた。「ハタラクラスぐんま地域日本語教室」と名づけたこの教室の目的は、日本で高齢期を主体的に生きる備えをすることにある。教室では毎回、異なるテーマについて、母語も交えて意見交換をし、高齢期への考え方の違いや共通点などに気づく時間を十分にとる。その上で、安全安心・元気に働き暮らすための知恵を出し合い、その知恵を日常生活で役に立てる日本語や日本語会話を習得してもらう。これまで、年金・介護・健康・冠婚葬祭・防災など、多様なテーマを扱ってきた。

指導者および学習者の教室への参加継続傾向は高く、日本語教育にも効果を上げている。しかし、外国人住民に日本で高齢期を主体的に生きてもらうためには、もう一歩、踏み込んでみたい実践があった。それは、外国人住民が地域の一員として「生き甲斐」をもって暮らす、というきっかけづくりである。

### 外国人住民それぞれの得意分野を活かした地域貢献

群馬県北部に位置する利根郡川場村は、2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催でアメリカ選手団のホストタウンとして登録された。観光資源が豊かな川場村は、今後、観光・保養を目的に多様な国々にルーツを持つ多くの訪問客が増えることが予想される。しかし、外国人観光客受入れ環境整備という点では、課題が山積している。そこで、外国人学習者とともに川場村をフィールドワークし、訪日外国人を受け入れるうえで課題となる事項の抽出と課題解決の



「日本語」だけでは意味がわからない  
掲示の確認

方策を検討した。

当教室では、外国人学習者の興味関心に合わせて、「ウォーキング」「料理」「お酒」の3つのテーマを設定し、それぞれの



「料理」テーマのひとつ「川場産のかぼちゃをつかった料理法を考える」

テーマに合わせた訪問ルートを考えて。外国人訪問客が理解できない言葉や文化は何か。地域関係者側がPRしないと見落とされがちな地域の資源や魅力は何か。地域住民にとっては気づかなかつた魅力は何か。これらを、川場村のみなさんに報告し、自分たちの視点で取り組みを提案すると、地域からさまざまな反響をいただいた。

### 「日本語で伝えたい」という思いの高まり

外国人学習者も「自分が地域に貢献している」という実感を持ちはじめた。その実感が結果として、「もっと上手に日本語で伝えたい」という外国人学習者の意欲を高めた。自分の子どもが小学生時代の教科書を引っ張り出して、漢字を書き写したノートを教室で見せてくれる学習者も現れた。作文指導の時間を設けてほしいというリクエストもいただくようになった。外国人学習者たちの主体的に学ぶ意欲に、今や、教室がどう寄り添っていくかが課題となってきた。

### プロフィール

結城 恵 (ゆうき めぐみ)

東京大学大学院博士課程修了。博士 (教育学)。専門は教育社会学。エスノグラフィの手法を用いて、ダイバーシティの視点から多文化共生のあり方を探る。外国人材の活用と地域定着化を図るため、産官学民協働で「グローバル・ハタラクラスぐんま」プロジェクトを立ち上げ、多文化共生推進士の養成、留学生就職促進プログラム、定住外国人のための地域日本語教室を展開。